新制
人
105

学位審査報告書

（ふりがな） 氏　　名	うえの　まさえ 上野　正恵
学位（専攻分野）	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博　第　426　号
学位授与の日付	平成20年7月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 環境相関研究専攻

（学位論文題目）

ウィルダネス概念とフィリア仮説に基づく環境リテラシー

論文調査委員	主査　教授　　間宮　陽介 副査　教授　　浅野　耕太 副査　教授　　西井　正弘

人間・環境学研究科

氏　名	上野　正恵

（論文内容の要旨）

近年、環境保護運動の高まりの中で、自然環境が人間にとっていかなる意味をもつかという根本的な問題が問われている。また環境問題はそれが人間ひとりひとりにとって切実な問題として感じ取られることがなければ解決はおぼつかないという観点から、環境教育の重要性が唱えられ、さまざまな実践活動を通して環境リテラシーの向上が図られている。本学位申請論文は、アメリカで環境教育に携わった経験をもつ申請者が、そのときの体験をもとにしながら、人間はなぜ自然を必要とするかを問いかけ、この問いを根源的に問いつめようとしたものである。

序に続く第１章では人間が自然に対して抱く愛着が「フィリア」として捉えられ、このフィリアが「バイオフィリア」として考察される。人間は生命もしくは生命に似た過程に対して関心を抱く内的傾向をもつ、これがバイオフィリア仮説であり、生物学者 E・O・ウィルソンの『バイオフィリア』を嚆矢として、その後、賛否両論が渦巻いた。本章ではさまざまな賛否両論が紹介されているが、特に重視されているのは、バイオフィリア仮説を深化させた S・R・ケラートの説であり、人間が自然に対して見出すとされる９つの価値をめぐって議論が展開されている。ケラートらバイオフィリア論者は、人間が生命体としての自然に対して抱く愛着は生得的で進化的根拠をもつことを主張する点で共通し、反対論者はそれが個人的特質にすぎないとする点でほぼ共通している。本学位論文申請者は、バイオフィリアの生得的・進化的性格を基本的には妥当とし、それを次章以降の出発点とする。

第２章では、「イメージ・フィリア」仮説が提示される。バイオフィリアが人間の自然に対する愛着の核にあるとしても、それだけでは人間と自然の関係はいわば生物と自然の関係にとどまる。生命体（バイオ）としての自然に対峙するのは生命体（バイオ）としての人間である。この隘路を突き抜けるために持ち出されるのがイメージ・フィリアであり、それはバイオフィリアにならって、「イメージあるいはその表現に対して関心を抱く人間の生得的な内的傾向」と定義される。イメージ・フィリアはバイオフィリアのいわば変形態であり、本章の議論は前章の議論と同一の論法で、すなわち、ケラートの９価値、そして A・マズローの基本的欲求の階層、発展図式をイメージ・フィリアに即して読み替える形で展開されている。ただし、イメージ・フィリアの対象としての自然はもはや生命体としての自然ではない。それは、象徴化された自然、シンボル化された自然である。このような自然と対峙する人間ももはや生命体としての人間ではなく、それは対象をシンボル化し、シンボル作用を通して対象に形を与える人間である。

人間と自然、そして両者の間に介在するイメージ・フィリア――この３者の関係は芸術活動と同型ではないか。このような直感の下に、第３章は芸術の構

造分析に充てられる。芸術は１つの創作活動であるが、それは混沌とした人間＝芸術家の感情にシンボル形式を与えるという側面（内発性）と、混沌とした外的自然を人間の了解にもたらすという側面（外発性）との２側面をもつ。この２側面は別物ではなく、一である、というのが本章の主張である。なぜなら、芸術家は創作活動によって外的自然を了解すると同時に自己を了解するからである。自己を了解するとは自己を開発することである。ここから芸術の教育機能が出てくるわけであり、H・リードらの芸術教育論をめぐって、詳細な議論が展開されている。芸術の教育機能を論じるのは、むろん、環境教育論との関わりを意識してである。

第４章では、アメリカ合衆国で発展を遂げた「ウィルダネス」という環境思想を手がかりにして、手つかずの自然、すなわち原生自然（ウィルダネス、wilderness）と人間との関わりが論じられる。原生自然は日本の里山のような自然とは異なって、人間を寄せ付けない、あるいは人間を拒否する、峻厳で超越的な自然である。それにもかかわらず人間は、このような自然と向き合い、このような自然から美的・宗教的霊感を受けてきた。本章では「崇高」という観念が原生自然＝超越的自然に由来することが詳論され、それが人間と社会に対していかなる影響を及ぼすかが論じられる。

第５章は第１章から第４章までの議論の総括であり、環境教育や環境リテラシーの問題に光を当てるために、議論の根底になぜバイオフィリアやイメージ・フィリアというフィリア仮説を据え付ける必要があったか、そして芸術という創造活動を論じる必要があったかが説明される。人間の自然環境に対する感受性はタブラ・ラサ（白紙）のようなものではないし、人間があらかじめ完成された生得の感受性をもっているのでもない。人間がバイオフィリア、イメージ・フィリアという自然に対する生得の指向性をもっているとしても、それはあくまでも可能性としての性向であって、可能態が現実態となる保証はどこにもない。環境教育が目指すべきは生得の可能性を現実のものとすること、そのためには実践活動を通して芸術家の創造性にも似た創造性を獲得していくこと、こうしたことが説かれている。

最終章である第６章は補論としての性格をもつ章である。フィリアとウィルダネスの概念が別の角度から再説されるとともに、それらの衰退に現代の環境問題の根元があることが述べられている。フィリアとウィルダネス（ここでは文字通りの原生自然と解する必要はない）の回復を図るためにわれわれは何をなさなければならないか、その指針が、子供をめぐる環境から、経済、国家、国際社会のレベルに至るまで、大まかにではあるが素描されている。

氏　名	上野　正恵

（論文審査の結果の要旨）

人間はなぜ自然を必要とするのか。このことを論じるために、本学位論文申請者は４００字詰め原稿紙にしてほぼ１０００枚を費やした。細い針に１トンの重圧をかけるようなものである。このような論文が「論文」として可能であるためには、自己主張がよほどしっかりしたものでなければならない。問題の所在が明確に把握され、その問題に対する自己の回答に強い確信がなければ、論文は諸説を概説するだけのものになってしまうであろう。

そもそも、「人間はなぜ自然を必要とするのか」という問いが、原稿紙１０００枚を費やして論じるに値する問題なのか。地球的規模での環境破壊を前にして標榜される、「かけがえのない地球」「環境にやさしく」といった標語は、人間が自然を必要としていることが自明だからこそ、世間に広く流通しているのではないか。このような疑問が生じるのも無理はない。だが、人間が自然を必要とするのがそれほど自明なら、なぜ熱帯雨林の消失が進み、南の島々が水没の危機にさらされるような事態が進行しているのであろうか。このような自明性を前提として行われる環境教育は、資源不足が深刻になると、もう１つの自明性、すなわち、人間は生きていくためには自然資源を必要とするという自明性にあっさりと道を譲ることになりはしまいか。人間が自然を必要とすることの自明性はいったん括弧で括り、棚上げしなければならない。そうした上で、人間が自然を必要とすることの根本を探求しようとするのが、本学位申請論文である。

問題に接近するための出発点を人間と自然の関係の仕方に置くのは当然である。このようなパースペクティヴで両者の関係を眺めると、一方の端には、人間を自然に外在させ、自然を人間にとっての手段と見る道具的、あるいは功利主義的自然観が位置し、他方の端には人間は自然に埋め込まれていると見る、例えばディープ・エコロジーのような自然観が位置している。一方は人間の主体性を極大化し、他方は極小化する。両者は、一方が行き過ぎればその反動として他方が力を増すといった、いわばシーソーゲームのような関係にある。これに対し、本学位申請論文は人間と自然の間に「フィリア」という生得の性向を置く。心理学者はこのフィリアをバイオフィリアとして捉え、しかもそれが静的なものではなく、人類の歴史の過程で動態的に進化したものだと考えた。だが、動態的だといっても、人類史のある時点をとれば、それは固定している。ひとりひとりの人間にとってはそれは如何ともしがたい所与なのである。所与のものを教育が開発しうるわけがない。

本学位論文申請者は、バイオフィリアならびにその進化的性格に基本的には賛同しながらも、人間と自然の関係を考えるにはバイオフィリア仮説では不十分だと考える。そこで仮説として提示されるのがイメージ・フィリア仮説である。バイオフィリアが第１のフィリアだとしたら、イメージ・フィリアは第２

のフィリアであり、それに応じて、生命体としての第１の自然は象徴やシンボルとしての第２の自然へと変態を遂げる。イメージ・フィリアという言葉は本学位論文申請者の造語であり、かつイメージ・フィリアを人間と自然の関係の考察に導入したことは、本論文の大きな貢献である。

しかしそれ以上に重要な貢献は、環境教育と芸術教育との間に単なる平行関係以上のものがあることを見出した点であろう。イメージ・フィリア仮説の導入によって自然は第２の自然に変態を遂げると言ったが、このとき人間の中の自然（human nature）＝人間性も第２の自然へと変態する。芸術という創造活動は自然を新たな相の下に描き出すと同時に、自己の中の自然をも創造し開発するのである。これは奇想天外な結論ではない。R・G・コリングウッドは、歴史認識は自己認識であると言ったが、歴史を自然と置き換えても彼の言は成り立つであろう。事実を書き連ねる実証主義的歴史家と違って、コリングウッドの歴史家は、資料を精査することを通じていわば歴史を創造する。と同時に彼は自己の何たるかを認識するのである。芸術的創造も同じだというのが、本学位申請論文の主張であり、ここから環境教育のあるべき姿が、芸術教育と重ね合わされて論じられるのである。

冒頭、本学位申請論文は細い針に１トンの重圧をかける感ありと述べた。その針圧は相当のものであり、この圧力をいかに分散するかが、論文構成上の鍵を握っている。章立て構成には苦労のあとが窺えるものの、必ずしも成功しているとは言い難い。またそれぞれの章は一点、一画まで気を配った記述がなされている半面、それが徒となって全体像が見えにくくなっている。記述に陰翳や強弱をつければ、もっと読みやすくなっていたであろう。それでも、このような構成や記述上の難点は、決して本学位申請論文の価値を損なうものではない。論文の着想は豊かで独創的、おそらく環境教育論の基本的文献の１つになるに違いない。また本学位申請論文は、自然と人間の調和的な共生を可能にする新しい科学・技術および社会システムのあり方を探求することを目指して創設された環境相関研究専攻共有環境システム論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２０年６月１９日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた